

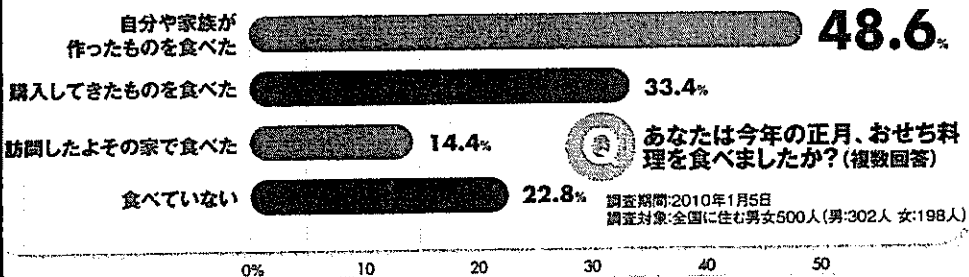
ネット世論調査 Net Research

今週のテーマ 正月の過ごし方

過半数が「巣ごもり」？ 8割弱がおせち料理食べた

この正月、自分や家族の実家などに帰省したのは47.4%。また、初詣でに行った人は47.0%だった。半数以上は、流行りの「巣ごもり」を決め込んだということか。百貨店やスーパーなどの初売りセールには、「1月2日に行った」という人が16.2%で、「1日」

(11.2%)、「3日」(6.4%)と続く。ただし、調査した1月5日時点で「行っていない」が62.6%と最多だった。正月恒例の福袋については、82.8%が「購入していない」。グラフのとおり、おせち料理を「食べていない」のは22.8%。日本の正月の伝統はどうか守られていると見るべきか。ちなみに正月に凧揚げをした人は2.0%だった。



ダイヤモンド 1月16日号

ようこそ卸売市場へ 魚の食べ方プロが伝授

「今日はいいネタが食文化の語り部」として、産地市場の卸会社や水産物卸協同組合などで組織した「日本おさかなマイスター協会」(東京・中央)は、授業後、児童からは歓声が上がった。

市民の台所と呼ばれる卸売市場。農水産物の産地直売や漁協との直接取引が広がり、その存在感は年々薄れている。活気を取り戻すために市場は消費者とどう向き合うのか。歳末の最新事情をスケッチした。

「今日はいいなネタが食文化の語り部」として、産地市場の卸会社や水産物卸協同組合などで組織した「日本おさかなマイスター協会」(東京・中央)は、授業後、児童からは歓声が上がった。

「今日はいいなネタが食文化の語り部」として、産地市場の卸会社や水産物卸協同組合などで組織した「日本おさかなマイスター協会」(東京・中央)は、授業後、児童からは歓声が上がった。

日本経済新聞 12月17日

流通問題

日刊水産

経済新聞

1月13日

発表された論文は、①つ、⑤水産物流通マージンが、旬や本当のおいめの小売ミックスを大幅に、漁業者の衝撃は大きく、産地価格の低迷が続く。昨年秋口からは急落しながら、そのためには、流通のもっている役割を、改めて魚価問題へのアプローチを試み、消費者双方が納得いく品質、価格の商品を適時・適地において架橋する本来の姿に戻す必要がある」と指摘した。

「今日はいいなネタが食文化の語り部」として、産地市場の卸会社や水産物卸協同組合などで組織した「日本おさかなマイスター協会」(東京・中央)は、授業後、児童からは歓声が上がった。

今こそ有機的分業体制の構築を

生産者
流通業者
小売業者

市村JF全漁連、濱田下関市立大学教授が論文発表



市村 部長 役



濱田 教授

水産物価格の推移・流通
段階別マージン率から

水産卸、中国向け拡大

築地魚市場は昨年11月、上海で開催された中国最大の食品見本市「FHC CHINA09」に初出展した。国内の水産加工メーカー3社と組み、三陸産のサンマやサケの調理済みパック製品や、長崎産の練り製品、冷凍加工したプリを出品した。評判が良かったため、今月から上海の大手デパートで販売を開始する。

築地魚市場は08年4月から中国向けに冷凍のマ

全国の水産卸会社が中国向け輸出を拡大する。業界大手の築地魚市場は今年中に調理済み加工品の出荷を始めるほか、中国国内で一般家庭向けの宅配業務にも参入する。長崎魚市（長崎市）は上海市内の常設店舗で大規模商談会を開催し、中国の他都市に販路を拡大する。低迷する国内市場に代わって、成長余地の大きな中国市場を開拓する。

築地魚市場 魚加工品や宅配も

長崎魚市 上海の商談会軸に

今月から中国国内で水産加工品の宅配業務にも参入する。現地に駐在する日本人向けが主だが、魚を空輸している。「全

国約1300ある卸売市場の一部だが、消費者にも生鮮食品を販売する市場は増えていく。愛知県一宮市の一宮中央市場で、消費者向けの鮮魚販売企画が小売業界の反発で宙に浮いたケースもあった。

だが、常連客は次第に姿を消す。大手スーパーなどの成長の陰で一般の生鮮食品店が相次いで廃業。12年前に青果卸が

日本経済新聞 12月21日

ようこそ卸売市場へ

食材探し楽しんで

「素人さんいらっしゃい」が定着し、平日の火曜日も一般客を増やそうと仲間の大東京総合卸売センター（東京都府中市）は11月1日から参加店は入居のほぼ半月から特売イベント「火曜日」を43年前の創業時に「1」始めた。豆腐を50円買い求め、朝からセリの掛け声が響く普通の卸売市場だった。高度成長期は地元の肉店や、近隣の多摩二精肉店で足を止めた地元40歳代女性は週3、4回来る。スーパーより高いものもあるが安いものもあると笑顔で話す。振り出し物の食材探しを楽しそうに様子だ。

月2回の土曜日の特売。廃業。12年前に青果卸が年間6万人を集客。20

日本経済新聞 12月21日

ようこそ卸売市場へ

氷菓・銭湯…広がる魅力

「メルカートセンター」それが今年9月には満杯になった。果物をふんだんに使ったジェラートで人気のお店だ。イタリア語で「市場」を意味する「シエラ」が今年9月にオープンした。卸売市場には珍しいおしゃべりな店の前を、プロの買い出し人も歩き回るとともに廃業や撤退が相次いだ。市場を開設する材料関連など最大約1100店舗が3割、人通りが激減した。かつては閑散としたジャッパに頭を痛めていた矢先の一街になりかけていた。起死回生となった。

大阪市南部の繁華街、難波に近い大阪木津地方にある店舗や施設で一般客を迎える動きは芽生え始めている。

日本経済新聞 12月24日

日経MJ 1月11日

春秋

若者はなぜ自動車を買わなくなったのか。自を手に入れ、仲間や恋人とドライブする人が、ある研究が示している。自動車販売戦略に携わっている人が、ある研究が示している。自動車販売戦略に携わっている人が、ある研究が示している。

それが若者の常識だとすれば、財布を開いてもうこのは容易ではない。

日本経済新聞 12月7日

